

外務省専門職員採用試験受験記

経済学部 武藤年和

この手の手記は、『私のとった外交官試験突破法』として法学書院から毎年出版されている。私も受験に際して参考にさせてもらったが、合格者が書きたい放題書いているので、“私はいかに楽又は苦勞して合格したか”と、その内容は、極端になりがちである。私自身どちらかと言えば後者だと思っているが、苦勞話などつまらぬものなので、大学生生活を振り返りながら、あっさり合格までの過程を述べてみたい。

私は、おぼろげではあったが、商業科の教員になりたいという希望を持って大学に進学した。広島大学など、私にとって普通では到底入れる大学ではなかったが、商業高校生には、数学の代替科目として簿記会計による受験が認められていたため、なんとか合格できた。そんなわけで、入学当初は大学の講義が理解できるかどうか不安で、サークルにも加入せず、アルバイトもせず、おとなしい生活をしてきた。前期が終わった時点で、数学と英語はかなり劣るものの、おおよその見当はついてしまったので、10月から生協の会館食堂で夕方2時間のアルバイトを始めた。ある程度資金ができた3年に上がる前の春休みに、1か月間ソ連を旅行した。

ここでやはり、私とロシア語について述べておかねばならない。よく人から「なぜロシア語を始めたのか」と聞かれる。私はいつも返答に窮して、「漠然とソ連に関心があったから」としか言うことができない。読んだことさえすっかり忘れてしまっていたが、しばらく前に自宅で本棚の整理をしていたところ、「モスクワ1,800日」なる本があったことからして、高校生の時から、何かしら引かれる

ものがあったようだ。どこの大学に行こうと第2外国語はロシア語だと決めてもいた。ロシア語の最初の授業で CCCP の読み方を習った時、なんだか嬉しくなってしまったことは、今でも忘れられない。それでも1年生の間は、授業に出る以外、特にしたことはなかった。ロシア語をさらに学びたいのと苦手な英語を避けたいということが合致して、2年生になってロシア語を第1外国語とし、授業以外にもテレビとラジオのロシア語講座を始めた。テレビの方は、気楽な構成なのでずっと続いたが、ラジオの内容について行けず、5月頃挫折してしまった。秋になって、ソ連旅行を真剣に考え始め、10月からラジオのロシア語講座に再挑戦し、結局出発日まで続いた。何か目的があると、取り組み方が違うのである。本来なら、ロシア語Ⅰが終わった時点でそうなるべきであろうが、ラジオを聴き続けられたことで、基本的な文法はひと通りやった、という自信を持つことができた。

専門の勉強が本格的になる3年前に、ロシア語学習の総決算のつもりで、ソ連に旅立ったわけだが、帰国した時には、より正確に言えば旅行中に、もともとロシア語を勉強しようという気持ちになっていた。そして、ロシア語、ソ連に関係のある職業に就きたいと思い始めた。前期は、米重先生に勧められた教科書の副読本を必死に勉強した。本を見ないでテープを聞き、単語を調べ、話しの筋がつかめたら初めて本を聞き、テープをそっくりまねて朗読し、暗唱し、仕上げで暗記したものを文字に興した。今になってみると、よくこんなことを半年も続けたものだと、自分でも思うが、これが私のロシア語の核になっ

ていることは確かである。

あれは夏休みの終わり頃だったと思うが、アルバイトへ行く途中、広大の東門で米重先生に偶然会い、立ち話しをしていると、ふとしたことから就職の話になり、「外務省の試験を知っているか」と尋ねられた。当時の私は、掲示板に貼ってある試験広告のポスターを見たことがあるくらいで、まさか自分が受けることになるとは思ってもいなかった。数日後、少し気になって調べてみたところ、試験については全く手が出ないという類のものでなく、大学の序列を考えるのは良くないことであるが、広大と同じ程度(と私は思っている)の大学出身者も合格しており、なんとかなるかもしれないと考えた。合格してロシア語が研修語になれば、ソ連に留学でき、ソ連で働けるというのが、大きな魅力であった。もうすっかりその気になってしまい、後期が始まると、受験を決意した旨を、米重先生に宣言してしまった。

採用試験での受験語の選択は、入省後の志望研修語を考慮する必要はない、と試験案内には書いてあるが、ロシア語に関しては、それを専攻している学生がおり、私がロシア語を希望したところで、相手にしてもらえないだろうと考え、ロシア語で受験することにした。それまでも質問があるたびに、研究室に押し掛けさせて頂いたが、週一回、時間を決めて和文露訳の指導を賜わることになった。

専門科目については、法・経済学部に関連する講義を手始めに聴講することにした。経済学部生の私が、3年の後期になって“経済の講義を手始めに”などとはおかしな話したが、数式の出るような講義を極力避けてきた私にとってみれば、経済学も憲法、国際法と受験勉強という点では、スタートラインは同じであった。自分で特に勉強を始めたのは3月からである。私は3科目を並行して勉強するのではなく、一科目ずつ順次片付けて行く方法をとった。当初の計画では、夏休み前にひと通り済ませ、試験までの2週間は総復習に当てるつもりだったが、休み前によや

く2科目目の国際法が終わったというありさままで、夏休みの1週間で経済学を済ませ、2週間目に総復習をただけで、試験を迎えてしまった。

話は前後するが、ロシア語・ソ連関係に就職したいから、という受験動機からして、何がなんでも外務省というわけでもなく、4年の4・5月頃は、民間への就職も考えていた。資料請求はがきに「ロシア語・ソ連関係に…」と書き添え、数社に出してみたが、反応が思わしくなかったのも、そちらの道はあきらめ、結果的に外務省一本ということになった。また、私の下宿の電話番号は、その手の筋に流れていなかったのも、就職関係の電話は、一度もかかってこなかった。悪く言えば就職戦線から完全に脱落していたということだが、返って落ち着いて勉強することができた。

試験の出来は全般的に低調で、大学の試験の感じで評価すると、憲法、国際法、外国語は可、経済学は不可であったと思う。1次試験で完全に不合格だと思い込んだ。他に就職活動をしておらず、受験勉強で心残りの点もあったので、留年して、再受験することにした。ところが、意外にも1次試験の合格通知が届き、米重先生と大喜びしたことは、今でもよく覚えている。結局、2次試験で不合格となったが、1次合格は、2度目の受験勉強の励みとなり、2次試験の様子がわかったことで、翌年の2次試験には、それなりの準備をして臨むことができた。

8月から翌年2月まで、試験のことはあまり意識しないで、のんびりと経済の勉強をした。長く続けた食堂のアルバイトも2月でやめ、3月から受験勉強を再開した。前回は、各科目とも基本書を一冊使ってサブノートを丹念に作ったが、今回は、基本書を3冊にして、ひたすら読むことにした。最初に紹介した本によると、答案練習を是非とも必要だとのことだが、私は構えて文章を書こうとすると考えすぎて書けなくなる質なので時間の無駄と考え、そのようなことはしなかった。

ロシア語については、1次試験以後、定期的な指導は中断し、質問があると研究室を訪ねるようになっていたが、4月から和文露訳を再開して頂いた。米重先生から読解力が不足しているのではないかとの指摘を受け、総合科学部の外書講読に便乗させてもらおうとしたが、受講者がなく開講されなかった。けれども、市川先生の御好意で、露文和訳の指導を受けられることになった。辞書さえあればなんとかなると思いがっていた自分であったが、そんなことは、一挙に覆された。おかげで、私のロシア語に対する姿勢を新たにすることができ、たいへんよい経験となった。

3月以降、知人は卒業して姿を消してしまい、4～5日誰とも話しをしないということもしばしばあった。民間就職が不利になることから、わざわざ留年したのに、全く就職活動もせず、試験日も迫ってきて、焦るばかりであった。気もだんだん狂ってきて、自分の適性・能力を考えもせず、大学院に進みたいと言い出す始末であった。とはいえ、やることだけはやって、試験に臨んだ。

前回と同様に評価してみると、今回は、すべて可といった感じで、前回の経済学のように大失敗した科目はなかったが、良の答案を書くことを目標としていただけに、こみで留年までして再受験した甲斐があったのかと、首をかきあげたくもなった。1次試験に合格できるか不安であったが、「昨年と同じ出来なら、受験者のレベルが変わっていなければ、きっと通るよ」と言って下さる先生があり、気楽に発表日を待つことにして、ロシア語の勉強をしていた。無事1次試験には合格できたが、先程の先生の言葉を裏返すと「昨年と同じなら、今年も2次で落ちる」ということになり、半分はあきらめの気持ちで、2次試験に挑んだ。気負いがなかったせいか、個別面接は、すんなりこなせ、外国語会話もなんとか切り抜けた。

2次試験の全日程修了後、1週間ほどして外務省から電話があるとほぼ合格である。前回も今回も、電話がかかってこないかと下宿で待ち構えていたが電話は鳴らず、一人悲しく大酒を飲んだ。さてこれからどうしようかと、毎日考えていたが、予想していた日より3日遅れて、最終選考の対象者になっているという連絡があった。9月末、受験を決意して1度2年、合格通知を手にする事ができた。

今回も落ちていれば、私はただの頑固者と言われていただろうが、終わり良ければ、すべて良し、である。外務省に入るための受験勉強は、大学に入るための受験勉強の思い出と重なるところが多い。高校の時も、放課後英語の先生に指導してもらい、他の勉強は、ひとりでコツコツやっていた。ただひとつ異なるのは、広大は、先生の反対を押し切った受験だったのに対し、外務省は、自信のなさそうな私を、先生が持ち上げてくれたの受験だったことである。どちらが私に向いているかは分からないが、良い先生に巡り合えたことは、幸せであった。

ロシア語・ソ連ということだけで外務省を志した私であるが、仕事的手段としてある程度ロシア語が身につけてしまった時には、自分の仕事そのものについて壁にぶち当たるに違いないと考えている。そんな時には、ヒロシマに5年間住んだことも何かの支えになるのではないかと思う。(日頃はあまり意識していないが、やはり広島はヒロシマである。)

本稿を執筆している現在、私は単なる採用試験合格者であり、外務省は未知の世界である。皆さん、こぞって受験しましょうなどと無責任なことはとても言えないが、2次試験の個別面接で質問されたことを最後に紹介しておく。

「何故、広島大学の皆さんは、この試験を受けないのですか。」